

1895 年刊『日本語独案内』について

陳南澤*

On the 1895 publication of "Nihongo Hitori Annai"

JIN Namtaek

要 旨

本稿では開化期の日本語学習書である『日本語独案内』(1895)に関して、その構成、韓国語の特徴、本書の基になっていると考えられる『日韓會話』(1894)と異なる日本語の単語や表現などを考察する。本書は日本語学習書でありながら、その韓国語は同時代のほかの韓国語学習書と比べても同時代の韓国語を良く反映していると思われ、言語学的な価値を持っているといえる。また、『日韓會話』(1894)は本書の他にも『旅行必用日韓清對話自在』(1894)の底本にもなっており、『朝鮮語学独案内』(1894)との関連性もうかがえる。今後、明治期の他の韓国語学習書や韓国人のための日本語学習書を総合的に考察することで、現代韓国語の形成過程をより明らかにできると期待される。

キーワード：韓国語、日本語独案内、開化期、日韓會話、

1. はじめに

本稿では、1895年に韓国人のための日本語学習書として京城（現在のソウル）で発行された『日本語独案内』¹⁾(明治28年、発行兼編纂者 稲益謙吉)に関して、その構成、韓国語および日本語の特徴、同時代のほかの韓国語学習書との関連性などを考察する。

1894年に韓国語学習書として刊行された『日韓會話』(明治27年8月刊行、参謀本部刊行)と『朝鮮語学独案内』(明治27年12月刊行、松岡馨著)には共通する文が多く、その関連性が指摘された²⁾。本書と『日韓會話』とは、ほとんどの例文が共通していることから、本書は『日韓會話』をもとに編集されていると考えられる。ただし、日本語の単語や表現には異なる部分も散見され、韓国語においても共通しない文もかなりみられることから、著者の役割も確認される。しかし、本書と『朝鮮語学独案内』だけに共通する文はあまりみられない。

本書は日本語学習書ではあるが、本書における韓国語は『日韓會話』と同様に19世紀末の開化期の韓国語の特徴を表しているため、韓国語文献としての価値を持つと考えられる。

* 岡山大学 言語教育センター

1) 本稿では日本国立国会図書館の所蔵本を分析対象にした。以下「本書」とする。

2) 成玗姪(2008)、陳南澤(2014)参照

2. 『日本語独案内』³⁾について

本書は1895年(明治28年)6月に稲益謙吉⁴⁾により京城で刊行され、大阪活版製造所で印刷された、韓国人のための日本語学習書である。本書は「緒言」(2頁)「目次」(2頁)「日韓両国仮名及諺文之対照」(2頁)「本文」(83頁)「附録」(7頁)で構成されている。

本書には跋文はなく、巻頭に「緒言」がある。緒言には日韓関係において日本語の必要性に関する簡単な説明、日本語の音声のハングル表記の問題に関する指摘はあるが、本書の著者や作成過程に関する説明は記されていない。本書の緒言は次の通りである。

緒言

去歲自征清役起以來東亞之局面
正一變矣就中余觀我國語能熾于
鷄林之野而交通乃貿易上喜有所
勢之推移也際此秋不暇念非才謏
劣鄙意功欲圖助長粗鹵之罪元所
甘受雖然一言以有可謝江湖事凡
諺文者不能整明寫日語之音本冊
中乃窮亦採所其相類似音多矣

於 朝鮮京城

明治廿八年五月某日 稲益謙吉、

目次の次に「日韓両国仮名及諺文之対照」がでるが、本文の日本語のハングル表記においては守られていないところも多い。たとえば、日本語の濁音は本文では激音(ㄷ, ㅌ, ㄴ, ㄹ)で表記されている例が多い。濁音の表記からもわかるように、日本語のハングル表記は文字転写の性格が強いと考えられる。

「日韓両国仮名及諺文之対照」

ア	아	カ	가	サ	사	タ	다	ナ	나	ハ	하	マ	마	ヤ	야	ラ	라	ワ	와	ガ	가	ザ	자	サ	싸	ダ	다	バ	바	パ	파
イ	이	キ	기	シ	시	チ	치	ニ	니	ヒ	히	ミ	미	イ	이	リ	리	井	위	ギ	기	ジ	지	ス	수	ヂ	지	ビ	비	ピ	피
ウ	우	ク	구	ス	수	ツ	투	ヌ	누	フ	후	ム	무	ユ	유	ル	루	ウ	우	グ	구	ズ	주	ツ	추	ブ	부	ヅ	주	フ	푸
エ	에	ケ	계	セ	세	テ	테	ネ	네	ヘ	헤	メ	메	エ	예	レ	레	エ	웨	ゲ	개	ゼ	제	ス	수	ヂ	지	ベ	베	ペ	페
オ	오	コ	고	ソ	소	ト	토	ノ	노	ホ	호	モ	모	ヨ	요	ロ	로	ヲ	워	ゴ	고	ゾ	조	ス	수	ヂ	지	ボ	보	ポ	포

本文は<図-1>のように二段で構成され、上段には日本語の単語や文がハングルで記され、下段にはそれに対応する韓国語の単語や文がハングルで書いてある。本書は韓国人のための日本語の教材であったため、日本語のハングル表記の右には片仮名が併記されているが、韓国語はハングル表記のみである。

3) 標題に「日本語独案内 일본말을 공부하는 책이라」と記されている。

4) 著者の稲益謙吉についてはあまり知られていない。彼は20世紀はじめに京城で発行されていた雑誌『韓半島』(1906年5月刊：韓半島社)に歴史関連の寄書「高麗朝の命數」(p177~178)を載せている。

로 ^ㄹ 구 ^ㄱ 쥬 ^ㅈ	시 ^ㅅ 치 ^ㅈ 쥬 ^ㅈ	니 ^ㄴ 쥬 ^ㅈ	구 ^ㄱ 시 ^ㅅ 치 ^ㅈ	쥬 ^ㅈ 산 ^ㅅ	이 ^ㅇ 치 ^ㅈ
	(고 ^ㄱ)	(고 ^ㄱ)	(나 ^ㄴ)	(잇 ^ㅇ 쥬 ^ㅈ)	(히 ^ㅎ 도 ^ㄷ 두 ^ㄷ)
	노 ^ㄴ 두 ^ㄷ	두 ^ㄷ	하 ^ㅎ 치 ^ㅈ	로 ^ㄹ 구 ^ㄱ	시 ^ㅅ 니 ^ㄴ
시 ^ㅅ 치 ^ㅈ 쥬 ^ㅈ	쥬 ^ㅈ 산 ^ㅅ 쥬 ^ㅈ	산 ^ㅅ 쥬 ^ㅈ	쥬 ^ㅈ (도 ^ㄷ 우 ^ㅍ)	(우 ^ㅍ 쥬 ^ㅈ)	(후 ^ㅎ 다 ^ㄷ 두 ^ㄷ)
			(오 ^ㅇ)		

일 (을나)	삼 (세)	오 (다섯)	칠 (일곱)	구 (아홉)	이십 (수물)	수십 (마흔)	백십 (예순)
이 (둘)	사 (넷)	륙 (여섯)	팔 (여덟)	십 (열)	삼십 (서른)	오십 (쉰)	칠십 (일흔)

又有一半調音殆當下行

バ	ダ	ザ	ガ
ビ	ヂ	ジ	ギ
ブ	ヅ	ズ	グ
ベ	デ	ゼ	ゲ
ボ	ド	ゾ	ゴ

斗	𪛗	𪛘	𪛙	𪛚
𪛛	𪛜	𪛝	𪛞	𪛟
平	𪛠	𪛡	𪛢	𪛣
𪛤	𪛥	𪛦	𪛧	𪛨
王	𪛩	𪛪	𪛫	𪛬

— 45 —

第三編	(一) 天文	第八 天文
	(二) 方位	第九 方位
	(三) 地理	第十 地理
	(四) 建設物	第十一 建設物
	(五) 国土	第十二 国土
第四編	(一) 官職	第十五 官位
	(二) 人族	第十四 人族
	(三) 親族	第十六 親族
第五編	(一) 身体	第十七 身体
	(二) 疾病	第十八 疾病
第六編	(一) 住居乃家具	第十九 家宅、第二十 家具
	(二) 飲食物乃食器	第廿一 飲食物、第廿二 食器
	(三) 衣冠乃織物	第廿三 衣冠、第廿四 織物
第七編	(一) 武器	第廿五 武器
	(二) 馬具	第廿六 馬具
	(三) 鐵器	第廿七 鐵器
	(四) 文房具	第廿八 文房具
	(五) 雜器	第廿九 雜器
	(六) 舟車及輜輿	第三十 舟車及輜輿
第八編	(一) 金石	第十三 金寶
	(二) 穀物	第三十一 穀物
	(三) 蔬菜	第三十二 蔬菜
	(四) 草木	第三十三 草木
	(五) 花卉	第三十四 花卉
	(六) 菓実	第三十五 菓実
	(七) 魚類	第三十六 水族
	(八) 鳥類	第三十七 鳥類
	(九) 獸畜	第三十八 獸畜
第九編	對談	第七編 第一章～第十章
第十編	雜語	

また、卷末に附録 として「第一 名詞 格之變化 私」、「第二 動詞 時之變化」、「第三 積極乃消極動詞之變化」、「第四 助動詞乃接續詞之例解」が付いている。

3. 本書の韓国語について

1894年前後には10種以上の韓国語学習書⁶⁾が刊行されているが、そのうち『日韓會話』(明治27年8月刊行)と『朝鮮語学独案内』(明治27年12月東京築地活版製作所刊行、松岡馨著)には共通する文または内容が類似する文が多く、その関連性が指摘されている。本書は、『日韓會話』とはほとんどの例文が共通しているが、本書と『朝鮮語学独案内』だけに共通する文はあまりみられない。このことは本書が『日韓會話』をもとに編纂されたことを示している。参考までに、『旅行必用日韓清對話自在』(明治27年7月刊行、太刀川吉次郎編輯)の文の大部分も『日韓會話』の本文と同じものである。以下、本書の文は頁番号を()に入れて表示し、『日韓會話』の文は「日會」、『朝鮮語学独案内』の文は「朝独」と表示する。また、『旅行必用日韓清對話自在』は「旅必」で示す。また、ハングル表記のない文献の場合は、便宜上、『日韓會話』などのハングル表記を用いて表わす。

本書と『日韓會話』の本文には共通する文が多いが、本書では文章の順序など多く編集されている。

◎ 本書と『日韓會話』において共通する文

- | | |
|----------------------------|------------------|
| (20) 올년스가 엇답더닛가? 풍년이랴오 | (日會-16)(朝独-125) |
| (33) 저 길이 갖가오나 므오 험호오 | (日會-224)(朝独-145) |
| (10) 이거슨 다시업는 호품이니 감홀슈업소 | (日會-238)(朝独-199) |
| (54) 창 다더라 브름이 든다 | (日會-197)(朝独-129) |
| (55) 현판글시가 뉘 글시요? 대원군의 글시요 | 111)(旅必-28) |

次のように 一部の文は『日韓會話』の表現の修正がみられる。

◎ 『日韓會話』の文に修正がみられる文

- | | |
|-------------------------|------------------------------|
| (21) 이월에 왓소? | (日會-6) 이월에 왓소 |
| (48) 그러면 알는 사름을 데리고 오시오 | (日會-99) 그러면 알는 사름을 데리고 오리라 |
| (54) 누가 오섯소? | (日會-106) 누가 오섯나? |
| (63) 시방은 만이안소 | (日會-144) 시방은 업소 |
| (77) 별노 소문이 업소? | (日會-199) 별 소문이 업소? |
| (77) 아모도 업소 | (日會-199) 아모 소문도 업소 |
| (82) 되게 짓지 말고 무르게 지여라 | (日會-231) 밝은 무르게 짓지 말고 되게 지여라 |

これらの例文は、両文献が共通の資料を参考にしたか、あるいは一方が他方を参考にしたことを示す。特に次の例文の「열개」「썸」のように間違っているハングル表記も共通していることは両文献の関連性を示している。

- | | |
|---------------------------------|----------|
| (12) 둘결 살 거시니 열기 (>열개) 만 가져 오느라 | (日會-243) |
| (45) 썸 (>썸) (日會-90) | |

また、次のように『日韓會話』の誤字(「나일>닐일」「비에>비에」「테>대」)を修正した例もみられる。

- | | | |
|----------------------|-------------------|-----------------------|
| 6) 『日韓英三國對話』(1892年刊) | 『日韓通話』(1893年刊) | 『日韓會話』(1894年刊) |
| 『實用朝鮮語正編』(1894年刊) | 『新撰朝鮮會話』(1894年刊) | 『速成獨學朝鮮日本會話篇』(1894年刊) |
| 『朝鮮語学獨案内』(1894年刊) | 『朝鮮俗語早學』(1894年刊) | 『旅行必用日韓清對話自在』(1894年刊) |
| 『日韓清會話』(1894年刊) | 『日清韓往復文』(1894年刊) | 『日清韓三國對照會話篇』(1894年刊) |
| 『兵要朝鮮語』(1894年刊) | 『朝鮮通語獨案内』(1894年刊) | |

(23) 너일 오딩에 썬다오	(日會-21) 나일 (>너일)
(65) 이 짐을 비에 다 시러라	(日會-161) 비에(>비에)
(68) 대	(日會-173) 데(>대)
(82) 되게 무르게	(日會-231) 무르게 되게

ただし、『日韓會話』では正しかったハングル表記が、本書では間違っているところも次のようにみられる。

(5) 여들냥(>여든냥)	(7) 데슬 (>네슬)	(13) 스십냥(>스십냥)
(21) 몇플(>몇출)	(26) 다라(>나라)	(26) 철노(>철도)
(29) 잇갯소(>잇갯소)	(32) 벽셔방(>박셔방)	(33) 츠차(>츠차)
(35) 셔계(>세계)	(41) 일온(>일은)	(43) 을나(>올나)
(56) 차섯소(>자섯소)	(69) 강어(>장어)	(71) 오피(>호피)
(72) 솔미(>솔마)	(74) 마홀스록(>만홀)	(79) 반녕(>반년)
(82) 만이(>안이)		

また、『日韓會話』と異なるハングル表記も散見される。

(3) 오십(원) / (日會-2) 오십(원)	(5) 원냥 / (日會-25) 원냥(오십냥)
(5) 여순냥 / (日會-25) 예순냥(육십냥)	(5) 일흔냥 / (日會-25) 일헛냥(칠십냥)
(12) 과허니 / (日會-242) 과호니	(16) 동지들 / (日會-5) 동지썰
(16) 셔들 / (日會-5) 석들	(17) 여세 / (日會-9) 엇세
(17) 글픽 / (日會-9) 글픽	(17) 극그저게 / (日會-9) 극그적게
(22) 부딤 / (日會-13) 부딤	(24) 븍름 / (日會-36) 븍름
(35) 나라이 / (日會-58) 나라히	

3.1 助詞

本書の「附録」の「第一 名詞 格之變化 私」では、助詞の用法が次のようにまとめられている。「내에 내와 내도」は方言の影響と思われる。

(와다구시)와 者於 나는 덕은 이거슨	等同 슌(>는) 은 슌
까 者於 내가 덕이 이거시	等同 가 이 시
노 者於 내에 덕의 이거세	等同 에 의 세
셰 者於 내가 덕이 이거시	等同 가 이 시
니 者於 내개 덕개 이거세	等同 개 세
도 者於 내와 덕과 이거과	等同 와 과
오 者於 내를 덕을 이거슬	等同 를 을 슬
모 者於 내도 덕도 이것도	等同 도

本書では主題格助詞「은/스/는」、主格助詞「이/시/가」、目的格助詞「을/슬/를」が使われている⁷⁾。参考までに連帶形語尾には「는/는」が使われているが、ほとんど「는」が使われている。

7) 『日韓會話』(1894)で使われていた主題格助詞「은/스/는」と主格助詞「치」は現れていない。また『朝鮮語学独案内』(1894)では主題格助詞「은/스/은/는」と目的格助詞「을/슬/을/를」が使われている。鄭吉男(1999:131)によれば、開化期の一部の韓国語聖書に「는」が少し現れ、当時の韓国の教科書や天主教関連文献では「는」が一般的に使われた。ただし、本書では「(84) 츠지 빗치가 가소롭소」のように、主格助詞「치+가」の両方が使われた例がみられる。

◎ 主題格助詞

(76) 나는 (84) 식은 (76) 뚝은 (10) 이거슨

◎ 主格助詞

(82) 이놈이 (84) 사람이 (84) 일이 (58) 내가 (22) 누가
(35) 나라이⁸⁾ (82) 뚫른거시도/늑즌거시도⁹⁾

◎ 目的格助詞

(82) 도적사름을 (44) 즈데를 (47) 세를 (76) 장스를 (7) 그거슬

3.2. 終結語尾

本書の「第十編」と「附録」は『日韓會話』と共通しないので、本書における語尾の様子はこれらを中心に考察する。本書の「附録」の「第二 動詞 時之變化」では、次の表のように時制が分類されている。

現在		未來		過去		未來	
シマス	허오	シマシヨ	헛시다	シマシタ	헛소	ナサイマセ	허시오
ユキマス	가오	ユキマシヨ	갑시다	ユキマシタ	갓소	ユキナサイ	가시오
イタシマス	허넵다	シマシヨ	허갓소	イタシマシタ	헛슴넵다	シナサイ	허오
イタシマス	헛넵다	ユキマシヨ	가갓소	마이リマシタ	가갓슴넵다	オイデナサイ	가오
マイリマス	감넵다	イタシマシヨ	허갓슴넵다	シタ	헛다	セヨ	헛다
スル	헌다	마이リマシヨ	가갓슴넵다	ユイタ	갓다	ユケ	가거라
ユコウ	간다	シヨウ	가갓다				
		ユコウ	가자				

「附録」の「第三 積極乃消極動詞之變化」は「肯定・否定」と関わる内容である。

アリマス	잇소	ナリマス	되오	ミヨ	보요
アリマセン(ナイデス)	업소	ナリマセン	못되오	미엠센	안보요
アリマシタカ	잇슴더넵가	ナリマシヨ	되갓소	미마스	보오
アリマセンカ	업슴더넵가	ナリマスマイ	못되갓소	미마센	아니보오
アリマシタ	잇슴넵다	ナルカ	되나	키마스	앗소
アリマスヨ	잇서요	ナラヌカ	못되나	키마센	아니앗소
アリマスヨ	잇지요				
アルカ	잇나				
アル	잇다				

8) 『日韓會話』(1894)で「나라」の場合、古い語形である「나라히」が使われている。参考までに『朝鮮語学独案内』(1894)では「나라가」が使われている。

(日會-59) 녹군은 어네 나라히 만소?

(日會-58) 세계 만국 중에 어느 나라히 데일 강호요?

(朝独-167) 어느 나라가 강호요?

9) 主格助詞の後に特殊各助詞がついている点が目立つ。「거시+도」

3.2.1. 平叙形語尾

本書では平叙形語尾として「네다/니다/니다, 올시다, 소, 오/요, 다」¹⁰⁾が使われ、「습나이다, 사외다」などは現れない。次は平叙形語尾の例である。

- ◎ 올시다
(30) 열닷냥이올시다 (日會-218)
- ◎ 네다/니다/니다
(12) 잇다가 가져 오겠습네다 (日會-243)
(13) 예순일곱냥 바다 왓습네다 (日會-28)
(84) 마장 잘허는 사름이 가옵니다
(附録) 허니다 허겠습니다 가겠습니다 헛습니다
(附録) 험니다 감니다
- ◎ 리다
(8) 그리 허리다 (日會-233)
(41) 오늘 쇼운호고 의논호여 보리다 (日會-83)
- ◎ 오, 요
(9) 감시 믹우 싸오
(76) 나는 장스를 허오
(80) 아무커나 원허오
(81) 고진말아니요 춤말이요
(82) 이놈이 바삭이요
(84) 낫후에 되면 아침부터 오시작지 보담 쓸새가 있는데 어는새 드려보니여주실터이요
- ◎ 소
(9) 혼풍도 캣을수업소
(9) 좇곰도 외누리업소
(21) 섯돌이 데일 침소
(80) 실례 호엿소
(80) 회방 허엿소
(81) 믹양 섯그롭소
(81) 응당 괴롭소
(81) 믹와셔 쭈구니 마시 변허엿소
(81) 곳 도라 도 오겠소
- ◎ 다
(43) 급하니 밤이라도 가야 호겟다 (日會-74)
(54) 방이 츠다 (日會-105)
(54) 브롬이 든다 (日會-107)
(84) 그런 일이 업지아늘터이다
(附録) 헨다 간다 가겟다 헛다 갓다

3.2.2. 疑問形語尾

本書では次のような多様な疑問形語尾が使われている。また、疑問形語尾「-가:-고」の対立は見られず、「-가」だけが現れる。

- ◎ 닛가¹¹⁾
(20) 올 년스가 엇답더닛가? (日會-16)
(63) 어데 두옴느닛가? (日會-147)
(附録) 잇습더닛가 업습더닛가

10) 参考までに明治16年本『交隣須知』には「네다」、『日韓通話』(1893)には「니다」、『朝鮮語学独案内』(1894)では「니다」、『新訂尋常小學』(1896)と『校訂交隣須知』(1904)には「니다」で現れる。『日韓會話』(1894)では「네다」が使われており、本書で「네다」「올시다」は『日韓會話』と共通する文にしか現れず、「리다」は使われていない。

11) 本書で「릿가」は現れていない

- ◎ 오, 요,
 (23) 틈이 잇슬넌지요? (日會-13)
 (23) 오늘 저녁에 비가 썩나오? (日會-21)
 (76) 댁은 무슨 씩씩 하시오?
 (80) 무슨 걱정이요?
 ◎ 소
 (54) 누가 오셨소? (日會-106) 누가 오셨나?
 (75) 편안이 슈엿소?
 ◎ 나, 나
 (13) 돈 츠자 왔나? (日會-28)
 (54) 나아리가 어데 가셨나? (日會-106)
 (57) 상 츠렛느나? (日會-118)

3.2.3. 命令形語尾

本書では極尊稱の「-쇼셔」は現れず、「-시오、-오、-라」が使われている。

- (9) 그갑세 풀면 밋지니 좀 더주시오
 (10) 흥덕 비허여 보시오
 (75) 허물마시오
 (80) 불너왓스니 마만이 기다리시오
 (81) 마룻처 주시오
 (80) 실스니 아서라
 (81) 웃지마오
 (附録) 허시오 가시오 허오 가오

3.2.4 勧誘形語尾

本書では勧誘形語尾として「읍시다/읍시다/되시다 자」が現れている。

- (78) 일본 말노 말습혀읍시다 (日會-200)
 (32) 저리 갑시다 (日會-43)
 (附録) 협시다 갑시다 가자

4. 本書の日本語について

本節では、本書と『日韓會話』(1894)の日本語において異なる単語や表現を中心に考察する。『日韓會話』では日本語の漢字には読み方が施されず、また本書では日本語をハングルと片仮名で表しているが、日本語に漢字は使われていない。

◎ 名詞

本書	日韓會話	本書	日韓會話
(39) 계집종 케지요 ゲジヨ	(85)婢	(38) 양반 약닌 ヤクニン	(67) 貴族
(7/39) 하인 쎄남/케난 ゲナン	(3) 下人	(49) 역길 허우서 ホウソ	(100) 天然痘
(8) 갑시 넷담와 네단ハ	(26) 代償ハ	(49) 안방 남토 ナンド	(104) 内室
(16) 거월 아독갯 아트ゲツ	(6) 去月	(67) 가지 나습비 ナスビ	(169) 茄子
(34) 밥값 함타이 한다이	(235) 飲料	(74) 각식으로 이로이로 イロイロ	(193) 各種ヲ
(35) 골목 거오지 コオジ	(62) 路次	(20) 새벽 미메이(요아게) 미메이(ヨアケ)	(19) 未明
(38) 계집 어나고 オナゴ	(66) 女	(24) 장마 린으(낫가시게) リンウ(ナガシケ)	(36) 霖雨

◎ 副詞や用言

本書		日韓會話	本書		日韓會話
(22) 부딪	세히 세히	必ズ	(33) 밋오	히토구 히도ク	(93) 大ソウ
(40) 갖치	잇서니 イッシヨニ	(80) 同時ニ	(43) 거러가면	아유태와 아윌데하	(74) 歩行スレバ
(10) 감흥슈업소	마가리마센 마카리マセン	(238) 引ケマセン	(48) 압꾸오?	이다미마수가 イタミマスカ	(97) 痛ヒデスカ
(22) 골몰히여도	이속가시구도모 イソガソクトモ	13 多忙ナルトモ	(57) 돛치 안소	여구 나잇테수 ヨクナイデス	(122) ワルイデス
(23) 써나면	다렘바 타테바	(20) 出發スレバ	(55) 죠흔게	여이노와 요이노하	(114) 宣シキノハ
(33) 험히오	케와시잇 케ワシイ	(224) 險阻デス	(63) 상히갯다	서쨌루 ソセル	(147) 損ジル
(33) 더우니	아다다갯타가라 アタタカダカラ	(228) 暑イカラ	(58) 상히엿소	쑤세마시다 ソセマシタ	(125) 損ジマシタ
(35) 쏘 낫부니	수고시 와루이가라 スコシワルイカラ	(236) ヨクナイカ ラ	(74) 쥬션히여	세와시테 세ワシテ	(187) 周旋シテ
(34) 깃쑤흔 겔	기레이나노 キレイナノ	(230) 清潔ナノ	(62) 몬드오?	두구리마수가 ツクリマスカ	(143) 製造シマスカ

◎ 表現や助詞

本書		日韓會話
(47) 세를 내여 보오	시다오 타시테 고람 시타ヲダソテコラン	(92) 舌ヲ出シテ見ラレヨ
(55) 뒤보는데 어테요?	가와야와 터곳테수가 카와야하도코데스카	(108) 廁ハドチラデスカ
(8) 이거시 무어시오?	고레와 나잇테수가 코레하나니데스카	(233) 之レハ何ント云ヒマスカ
(21) 동지쥬 되면	쥬이치과두니 나렘바 쥬이치クワツニナ레바	(7) 十二月ニハ
(21) 이월에 왔소?	넉과두니 오잇테테시다가 クワツニオイデシタアカ	(6) 二月ニ來マシタ
(32) 궁촌이라 히고 큰 동너 가 잇소	규선도 유테 어오기나 무라가 아리마수 クウソントユテオオキナムラガアリマス	(47) 宮村ト云フ大村ガアリマス
39) 쑤샹계서 춘쥬가 얼마나 되시요?	쑤세요노 도시와 오이구뎡테스가 シュシヨノトシハオイクトデスカ	(79) 主上ハ御イクツデスカ
(54) 나아리가 어데 가섯나?	탐나와 티고니 오잇테가 단나하도코니오이데카	(106) 旦那ハドコヘカ御出ニ成ツタカ
(77) 관겨치 안소	오가마이 나사레마수나 오키마이ナ사레마스나	(203) 御カマイ下サレマスナ
(75) 나히 얼마나 되시요?	오도시와 이구뎡테가 오토시하이クト데스카	(194) 御歳歲デスカ
(43) 밤이라도	여루니낫제모 요르니나츠데모	(74) 夜中デモ
(74) 쓰시려오?	이리마수가 이리마스카	(191) 御入用デスカ
(33) 흥장 쏘이냐?	이치마이 싸가리가 이치마이바카리카	(229) 一枚ノミカ
(64) 드지안소	기레마세누 키레마세ヌ	(152) 切レマセン
(79) 아르시갯소?	와가리마수가 와카리마스카	(205) 御ワカリニナリマスカ

5. 終わりに

本稿では開化期の日本語学習書である『日本語独案内』(1895)に関して、その構成、韓国語の特徴、本書の基になっていると考えられる『日韓會話』(1894)と異なる日本語の単語や表現などを考察した。

本書は日本語学習書でありながら、その韓国語は同時代のほかの韓国語学習書と比べても同時代の韓国語を良く反映していると思われ、言語学的な価値を持っているといえる。

また、『日韓會話』(1894)は本書の他にも『旅行必用日韓清對話自在』(1894)の底本にもなっており、『朝鮮語学独案内』(1894)との関連性もうかがえる。今後、明治期の他の韓国語学習書や韓国人のための日本語学習書を総合的に考察することで、現代韓国語の形成過程をより明らかにできると期待される。

<参考文献>

- 김완진(1978), 「母音体系와 母音調和에 대한 反省」, 『語学研究』 14-2、서울대학교 어학연구소 (『音韻과 文字』(1996)에 재수록)
- 김형철(1997), 『개화기 국어연구』, 경남대학교 출판부
- 박영섭(1994), 『개화기 국어 어휘 자료집』 1卷~5卷, 서광학술자료사
- 成玟珂(2008), 『近代日本語資料としての朝鮮語会話書－明治期朝鮮語会話書の特徴とその日本語－』, 東京大学博士論文
- 申昌淳(2003), 『國語近代表記法の 展開』, 太學社
- 유필재(2001), 『서울지역어의 음운론적 연구』 서울대학교博士学位論文
- 李康民(2006), 「메이지(明治)期 參謀本部의 韓國語 學習書-1894年刊『日韓會話』와 관련하여」, 『日本語文學』 第31輯 pp.211-232, 韓國日本語文學會
- 鄭吉男(1992), 『19세기 성서의 우리말 연구』, 서광학술자료사
- 鄭吉男(1999), 『개화기 교과서의 우리말 연구』, 박이정
- 陳南澤(2010), 「『日韓英三國對話』におけるハングル表記と仮名音註について」 『大学教育研究紀要』 第6号
- (2012), 「『日韓通話捷徑』における仮名音註について」 『大学教育研究紀要』 第8号
- (2013), 「『朝鮮語学独案内』における仮名音註について」 『大学教育研究紀要』 第9号
- (2014), 「1894年刊『日韓會話』の韓国語について」 『大学教育研究紀要』 第10号
- 桜井義之(1974), 「日本人の朝鮮語学研究」 『韓』 Vol.3 No.7
- 山田寛人(1998), 「朝鮮語学習書・辞書から見た日本人と朝鮮語 -1880年~1945年-」 『朝鮮學報』 第169輯
- 小倉進平(1940), 『増訂朝鮮語学史』 刀江書院

<分析資料>

- 稲益謙吉(1985), 『日本語独案内』, 国立国会図書館所蔵 (日本)

<参考資料>

- 松岡馨(1894), 『朝鮮語学独案内』, 国立国会図書館所蔵 (日本)
- 太刀川吉次郎編輯(1894), 『旅行必用日韓清對話自在』, 国立国会図書館所蔵 (日本)
- 赤峯瀬一郎(1894), 『日韓英三國對話』 国立国会図書館所蔵 (日本)
- 參謀本部(1894), 『日韓會話』, 国立国会図書館所蔵 (日本)

